

臨界期

2025.6.27

「臨界期」というものがある。認知発達の過程で、学習や習得に最も適した時期のことである。その時期を過ぎると、学習が非常に困難になってしまう。

各機能の臨界期は、一生に一度しかない。この時期に様々な刺激を受けることは、その後の発達に大きな影響を与えるため、幼児期の家庭環境はもちろん、保育所や幼稚園で過ごす時間はとても大切である。

臨界期で大切な時期は、一般的に以下のようになっている。

言語能力：0歳～9歳

運動能力：0歳～4歳

絶対音感：0歳～4歳

数学的能力：1歳～4歳

臨界期の例でわかりやすいのが言語能力である。日本に住んでいれば、必然的に話すのは日本語になる。まだおしゃべりができない赤ちゃんも日本語で語りかけられ、周りは常に日本語が飛び交う環境であるため、脳は日本語に対応した言語的知性を作り上げていく。

子どもが特に何もしなくても自然と日本語を理解し、話せるようになるのは、言語臨界期にたくさんの日本語に触れ続けているからである。この言語臨界期に英語を学び始めれば、日本語だけでなく英語も一緒に覚えることができる。

我が家の中の息子は、2歳から4歳までの3年間をイタリアで過ごした。最後の1年間は、幼稚園に通った。そこには、日本人の子もいれば、イタリア人と日本人のダブル（ハーフ）の子、イタリア人の子もいた。日本語が話せない子のほうが多い。息子は、急激に、すごいスピードでイタリア語を吸収していった。あっという間に、抜かれてしまったような感がある。

日本に戻り、福島の幼稚園に通い出した。すると、今度はこれまで急激な勢いで、日本語というか福島弁をマスターしていった。イタリア語は、あっという間に、どこかにいってしまった。臨界期とは恐ろしいものだと認識した覚えがある。

スポンジのように学びを吸収する臨界期は、様々なことにチャレンジするよい機会である。学びのスピードもアップするため、やりたいと言ったことはできるだけやらせたい。子どもは、自分のやりたいようにやっているときが一番能力を伸ばすそうである。

幼児教育は、臨界期そのものである。すなわち、学習や習得に最も適した時期である。この時期を逃すとチャンスは減っていく。そう考えると、非常に大切な教育期間であることを肝に銘ずる必要がある。